

わたしの「言語学概論」

竹内和夫

えらいことをお引受けしたものと後悔しておりますが、各大学の言語学概論なり概説なりでは、先生方がどんな講義のしかたをされているのだろうか、いつも気にかかっておりますので、恥ずかしながら勇をふるって本日は岡山大学での実践報告、わたしのささやかな試みをお話しし、御批判をいただきたいと思います。

思い起しますのは、東京大学の学生であったころの服部四郎先生の概論です。先生は後に論文として御発表になった「具体的言語単位並びに抽象的言語単位」とか「付属語と付属形式」とかを講義されました。基礎のない当時の新入生にとっては理解がやや困難であった思い出がございます。

また、今日では外国人の書いた概説書がたくさん翻訳されておりますが、どうも日本人むけにはぴったり来ないという、うらみがございます。こういった経験から、高校を出たばかりの言語学コースの学生6人(このほかに国語、英語、フランス語、ドイツ語、中国語コースの学生40人ぐらい)を相手に、いくつかの試みをしてまいりました。

そのひとつは、言語に関する20項目のアンケート(○×式)を最初にやってみることです。回答の集計を次の時間に発表しながら、われわれの「常識」のあやしさ、とくに日本語に関する誤解が大変多いことに気づかせます。20項目については、三回(300分)ぐらいかけて解説していきます。

第二の試みは、18cm×13cmの厚紙のカードを渡し、毎時の講義内容について感想や質問、よく分らなかった点などを書いてもらうことです。これは、ひとつには、しゃべりっぱなしの講義をつけて一年後に、試験の答案を見て、がっかりするのを避けたいという気持、それから「学問は分るものである」ということを分ってほしい気持からです。やっかいな質問が書かれてあったりして、こちらで調べなおすことが再三です。ときには宿題を課して考えてくるのに使います。年に5、6枚(裏表)のカードを使う学生もおります。

第三に、言語というものを理解してもらうために、Martinet: *Éléments de linguistique générale*, p. 20 の *Qu'est ce qu'une langue?* のところをコピーして渡し、これを分りやすく時間をかけて解説していきます。この辺で夏休みが近づきます。

第四に、理解を助けるための用例は、できるだけ日本語から取ることです。わたしと学生との間で共通の言語は、なんといっても日本語ですから。こういう立場で音声とフォネム、形態論、文

論へとすすみ、「国文法」批判に力を入れます。生成文法には触れません。ついで言語学の歴史に入りますが、ここではヨーロッパにかたよらず、「そのころ日本では……」という風に世界史的な？視点を取り入れて、日本人や中国人の業績も評価していくようにしています。

年度末の試験では、ノートなど何でも参考にしてよいことにしておりますが、さて今年の結果はどうでしょうか。